

大学生による高齢者との対人関係の困難に関する原因認知

吉田 薫・横山奈緒枝・細川つや子・下村文子・田中共子

1. 問題と目的

高齢者の対人関係については、社会関係やソーシャル・サポート・ネットワークの視点から調べた報告が多く見られるが(玉野ら, 1989; 古谷野ら, 1995; 西村ら, 2000)、関係の中身は概ね家族や親族、友人・知人などとの対人関係が大半を占めており、家族以外との関わりはあまり述べられていない。家族の中でも、配偶者や子どもが多くを占めており、加えて孫との関係の指摘がわずかに見られる。高齢者と家族以外の若年層との関わりを報告したものが総じて少ないことは、両者の交流の希薄さを伺わせる。人間は社会的な動物であることから、物理的孤立および心理的孤立が高齢者の健康にとって重大な危険要因であることは、老年学の領域においては周知されているが、現状では高齢者の対人関係が家族や高齢者同士に閉じがちで、若い世代との交流が限られているとするなら、それは決して望ましい状態とはいえないであろう。

日本社会においては、人間関係が特に重要になるという指摘もある。秋山(1997)は、人々の日常生活における喜びとストレス源を調査した実証的な日米比較研究を行っている。そこでアメリカ人にとっては金銭や仕事が主要な喜びとストレスの源であるが、日本人にとっては人間関係が最大の喜びの源であり、またストレス源でもあると報告している。つまり日本の高齢者にとっては、対人関係の形成は一層重要な問題になりうると考えるなら、独居高齢者の増加や孤独死などが問題となる今日、高齢者と家族以外の異世代との交流が地域で一層増加するような方策を広く考えていく必要があるといえるだろう。

ただし高齢者の幸福確保のための交流をめざすだけでなく、両者の「共生」の実現が今後の目標になるという考え方もある。近代化・欧米化に伴い、日本社会でも日常生活の個人化と人間関係の希薄化が懸念されてきているが、上記の秋山(2000)は、高齢社会の今後の課題として「自立」を促進すると同時に「連帯」を志向して努力することをあげ、自立と共生を同時に追求する必要があることを強調している。この意味では、若い世代との交流を成立させることは、社会的な課題といえる。

若年層や社会の側からみた共生の必要性は、人口構成の変化に端を発する社会的変化からも指摘されるところである。日本の65歳以上人口比率(65歳以上人口が全人口に占める割合)は、1994年には14%を超えたが、2020年には割合が27.8%、総人口のほぼ3分の1が高齢者という超高齢社会を迎えると予想されている(平成13年度国民生活白書)。塚野(2000)は、若年・成年世代に支えられた高度成長・自由競争社会から、高年世代を含めた安定成長・共生社会への転換のため、若年世代は高年世代と共

存の必要があり、高齢者と一緒に生活する体験をもち、理解を深め、支援することを学んでいかなければならないと主張している。

嵯峨座(2000)は、21世紀の高齢社会構築のための2提案として、一つ目は効率から「交流」への転換を指摘しており、これは高齢社会では人と人との関係が中心になるからだとして述べている。また二つ目には、現在は社会保障制度、とりわけ年金制度のあり方をめぐって若い世代と高齢の世代の間に世代間対立が顕在化していることを挙げ、そのような世代対立は解消すべきことを指摘している。このようにして世代間の交流と共生が高齢化社会における社会的課題として意識される一方で、世代間のコミュニケーションに伴う障害が指摘されている。

その一つは社会的認知における否定的側面の存在である。藤田(2000)は、高齢者との相互作用場面では、高齢者に対するイメージが重要な要因になると述べており、なかでも「エイジズム」と呼ばれる高齢者に対する否定的なイメージがステレオタイプや偏見となって、高齢者とのコミュニケーションの機会を減少させている可能性を指摘している。高齢者に対するステレオタイプに関しては、Palmore(1990)は、高齢者の偏見は「肯定的」なものとして「否定的」なものがあると述べている。林(1989)も、高齢者のパーソナリティには「否定的老人像」「肯定的老人像」「現実的老人像」という3つのステレオタイプが存在しているとしている。具体的には、否定的老人像として、「保守的」「自己中心的」「頑固」「嫉妬深い」「ケチ」といったものが挙げられ、若年層から嫌われやすい老人像となっている。ただし肯定的老人像として、「深い学識や経験的知識を持つ」「思慮深い」「微妙な人の心のひだを読み取ることができる」「様々な領域で優れたリーダーシップを発揮する」なども挙げられており、認知の両価性が伺える。

高齢者のコミュニケーション能力に関しても、ステレオタイプが存在するという指摘がある。Ryanら(1994)は、若年と高齢の被験者に対して、それぞれ25歳と75歳の話し手に対するコミュニケーション能力を判定させた。その結果、若年者と高齢者の両方もが、75歳の話し手のほうが25歳の話し手よりも、話し声が小さすぎ、雑音のあるときは聞き取りにくく、聞き取りにくいので不満を感じ、誰が何を言ったのか分からなくなり、発言が長く、発言が早すぎ、同じことを何度も繰り返させ、話題が長くなりがちであるという、否定的なステレオタイプを持っていることを示した。逆に、肯定的なステレオタイプは、75歳の話し手のほうが25歳の話し手よりも、優れた語彙力があるというもののみでみられた。つまり高齢者はコミュニケーション能力が低く、話し相手として望ましくないという認知は、高齢者自身も含めて浸透しているように思われる。

藤田(2001)は、高齢者とのコミュニケーションにおいて、高齢者に対する否定的イメージが、コミュニケーションに影響を与える可能性があると考え、総務庁長官官房高齢社会対策室が1999年に行った「児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査」を基に、若年層が持つ高齢者に対するイメージがコミュニケーションに与える影響について検討している。高齢者との交流への参加意向が見られなかった中学生と高校生を対象に、参加したくない理由を質問した結果、全体で最も多い理由は、「勉強や部活動、

遊びなどが忙しく、暇がないから」(37.2%)で、自分自身の時間の使い方に関する理由を挙げているが、消極性の現れともみてとれる。他には「お年寄りとは話が合わないと思うから」(37.0%)、「お年寄りとは活動のペースが合わないと思うから」(31.7%)、「お年寄りとは趣味の対象が違うと思うから」(26.3%)、「お年寄りに気を遣うのは煩わしいから」(21.8%)との回答が多かった。高齢者に対して、話題の共通性が少なく、気を遣わされる相手として認知しているのである。

以上のことから考えると、高齢者の否定的イメージという認知が接触の機会づくりへの動機付けを低め、話す時の声の大きさや、発言の長短、話題の選び方、ペースなどコミュニケーション行動の困難さの認知が交流への行動化を低めることが推察される。接する機会と交流が少ないことは、さらなるステレオタイプの拡大をもたらすことが予想される。接触仮説(斎藤, 2000)の考え方に基けば、接触の機会こそが理解の増進と偏見の低減をもたらすものであり、高齢者との交流状況の乏しさを改善することが望まれる。

厚生労働省は、高齢者に対する偏見や先入観を持たないようにするためには、世代間交流や子供の頃から高齢者への理解を深める学習が必要だと勧めている。しかし核家族化の進行により、祖父母との交流の機会が減少している中で、コミュニケーションの機会自体の減少は否めない。その上介護や年金といった高齢者に関わる社会問題がメディアに取り上げられる機会が多いため、若者の持つ高齢者イメージは、現実の高齢者像というよりは、メディアによる影響を大きく受けているのではないかと危惧される。

交流の機会の少なさとそれによるステレオタイプの発生・増幅という構図は、日本人と在日外国人留学生の関係にも見いだされる。若年層と高齢者という同文化内異世代間の交流は、日本人と留学生という異文化間同世代内の交流と比べると、異質さを抱えた者同士の交流という点において似通っている。留学生の適応研究では、その異質性に対する正しい理解と異質性に起因する困難に対する対処を知ることが、交流の進展と相互理解を導くものと考えられているが、これは高齢者と若年層の交流に関しても当てはまるのではないだろうか。

田中(2003)は、日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知を比較し、両群ともソーシャルスキルの不足を最大の原因とみなしていることを示し、適切なソーシャルスキル教育が日本人学生と留学生の間で双方向的に行われることが関係形成に効果的であることを示唆した。高齢者と若者の間でも、交流が進まない原因を探り、両者に必要な教育への手がかりを得て、スキル獲得を目指した介入を行うことができれば、交流機会の少なさとそれによるステレオタイプの発生・増幅という悪循環を断ち切り、交流の増加につなげていけるかもしれない。

本研究では、若者と高齢者の対人関係の形成が困難である原因を、若者を対象に調べてみようと考えている。そして高齢者側と若者側の原因のいずれに原因認知が傾いているかを明らかにして、若者側に心理教育的な手法でアプローチ可能な部分を見いだすことができるかどうかを検討してみたい。具体的には、若者と高齢者との対人関係の形成困難の原因認知について、どのような理由への評定が

高く、自分と高齢者といずれの責を重く見るのか、その差の大きい認知は何か、こうした「原因認知」の因子構造は何なのかを探る。そこから若者はどうして高齢者と付き合いにくいと思っているのか、どうしたら付き合うようになるのかを推し量り、スキルは直接・間接にどういう役に立つのかを、同文化内異世代間（若者－高齢者）と異文化間同世代内（日本人－留学生）の原因認知の比較を手がかりに考えてみたい。

2. 方 法

- (1) 調査対象者 O大学の学生を若年層の調査対象として設定した。大学生207名の構成は、性別については男性55.4%、女性44.6%、年齢については20歳未満79.5%、20歳以上20.5%。
- (2) 手続き 2004年6～7月に、授業中に自記式質問紙を配布・回収する集団法によって調査を実施した。
- (3) 調査項目 質問項目は、回答者の高齢者との交流度合いを尋ねる以下の1)～3)と、若者と高齢者との交流の困難の原因認知を測る4)と、高齢者と上手に付き合う方法に関するニーズを尋ねる5)から成る。
 - 1) 現在のお付き合いの程度：①家族や親戚を含めたお年寄り(身内交流度)、②親戚や家族以外のお年寄り(一般交流度)に、1.「わりと深い話」をして個人的にお付き合いしている人がいる、2.「一般的な話」をする人はいるが特に親しく付き合っているわけではない、3.「挨拶」をする程度の関係の人がいるが付き合いというほどではない、4.話をしたことのある人はいるがその後会うような関係ではない、の4段階評定(1～4点を付置)。
 - 2) 交流希望度：「お年寄りとお付き合いしたい」とどのくらい思うかを、1.とても思う、2.やや思う、3.どちらともいえない、4.あまり思わない、5.まったく思わないの5段階評定(1～5点を付置)。
 - 3) 交流が困難だと思う程度(交流困難度)：「お年寄りとはお付き合いしにくい」とどのくらい思うかを、1.とても思う、2.やや思う、3.どちらともいえない、4.あまり思わない、5.まったく思わない、の5段階評定(1～5点を付置)。
 - 4) 若者と高齢者との対人関係の困難に関する原因認知：田中(1995)の留学生と日本人学生の調査で用いた7領域14項目をもとに、表現の修正と追加項目を加えた。若者(大学生)には、「あなたからみて、自分がお年寄りにつきあいにくい原因があるとしたら、それは何でしょうか。次のことがその理由としてどのくらい当てはまると思う(その通りだと思う)かを、教えてください」と尋ね、1.まったく当てはまらない、2.あまり当てはまらない、3.やや当てはまる、4.非常に当てはまるの4段階評定(1～4点を付置)。質問文は、「自分」と「お年寄り」の主語を置き換えた2項目ずつの対で、若者のことを主語では「自分」、文中では「若者」としてある。2項目ずつの対は、主語以外の文章をできるだけ同じにして、比較の便宜をはかった。

設定した領域は、田中(1995)で設定された7領域から「語学」の上手・下手を「話」の上手・下手に直して、「会話」、「スキル」、「知識」、「無関心」、「嫌い」、「多忙」、「個人的事情」の項目設定はそのまま用いた。「スキル(日本人の考え方や行動の仕方、ルールがよく分からないから)」と「知識(日本社会の仕組みや慣習をよく知らないから)」は表現を変え、「お年寄り(若者と上手につきあう方法を知らないから)」、「お年寄り(若者についての知識が少ないから)」とした。「個人的事情」は先行研究では単項目だったものを、比較の便宜のため対比の文を追加したが、自然な表現にするため「話の合う人や魅力的な人が少ない」と「話の合う人や魅力的な人だと思ってくれる人が少ない」にした。これらは表現は対応しないが、意味の対応を意図した。追加項目として、藤田(2001)が指摘する「若者が高齢者と交流したくない理由」から、「ペース」、「煩わしさ」の2領域を追加した。彼らは他に、多忙、話題のあわなさ、趣味の違いをあげているが、それは上記の「多忙」、「個人的事情」に反映されているものと考えた。以上、2領域4項目を用いた。さらに追加項目として、藤田(2001)が指摘する、若者と高齢者の相互の「コミュニケーション能力の認知」のギャップを調べた項目のうち小声、聴力、混乱、長さ、早さ、繰り返し、語彙力、話題忘却、語彙力、相手への帰属から、まとめて「身体機能」、「認知能力」の2領域を加えた。報告の中で若者から高齢者への評定が比較的良かった「長さ」「相手への帰属」「語彙力」は、対人関係形成の原因になりにくいものと考えて省いた。さらに、交流の意欲があっても行動化の段階で障害が生じている可能性を考えて、「必要」、「機会」、「積極性」の3領域を独自に設定した。以上合計16領域32項目(Table1)に評定を求めた。

- 5) 学習希望度：高齢者との交流に関するソーシャルスキル学習に関してのニーズを尋ねる項目として、「お年寄りとの上手な付き合い方について、もし授業中に取り上げて説明してもらえたら、その話を聞いてみたいですか」として、①とても聞いてみたい、②やや聞いてみたい、③どちらともいえない、④あまり聞きたくない、⑤まったく聞きたくないの5段階評定(1～5点を付置)。

3. 結 果

(1) 高齢者との交流の度合い

- 1) 身内交流度 家族や親戚のお年寄りとは、個人的に親しいお付き合いが73名(36.1%)、「一般的な話」程度101名(50.0%)、「挨拶」程度15名(7.4%)、話をしたことがある程度13名(6.4%)で、平均は1.84 (SD=0.82)。8割以上がある程度以上のお付き合いをしている。
- 2) 一般交流度 家族や親戚以外のお年寄りとは、個人的に親しいお付き合い3名(1.5%)、「一般的な話」程度30名(14.7%)、「挨拶」程度88名(43.1%)、話をしたことがある程度83名(40.7%)で、平均3.23 (SD=0.75)。8割以上が付き合いといえるような関係を持たない。
- 3) 交流希望度 お年寄りとおつきあいたい、ととても思う12名(5.9%)、やや思う79名(38.7%)、

Table1 高齢者との対人関係の困難に関する原因の認知

原因の認知	平均(SD)	順位		
		全体	若者側	高齢者側
(1) 話があまり上手くないから：高齢者	1.86(0.74)	28	—	13
(2) 話があまり上手くないから：若者	2.61(0.87)	4	3	—
(3) 上手に付き合う方法を知らないから：高齢者	2.05(0.81)	23	—	8
(4) 上手に付き合う方法を知らないから：若者	2.61(0.87)	4	4	—
(5) 知識が少ないから：高齢者	2.20(0.86)	17	—	5
(6) 知識が少ないから：若者	2.53(0.81)	7	6	—
(7) あまり関心がないから：高齢者	1.84(0.75)	29	—	14
(8) あまり関心がないから：若者	2.24(0.88)	15	12	—
(9) 好きでなかったり苦手だったりするから：高齢者	2.12(0.79)	20	—	7
(10) 好きでなかったり苦手だったりするから：若者	2.11(0.87)	21	14	—
(11) 忙しくてゆっくり付き合う暇がないから：高齢者	1.60(0.76)	32	—	16
(12) 忙しくてゆっくり付き合う暇がないから：若者	2.58(0.89)	6	5	—
(13) 話の合う人や魅力的な人だと思ってくれる人が少ないから：高齢者	1.93(0.84)	26	—	11
(14) 話の合う人や魅力的な人だと思ってくれる人が少ないから：若者	2.09(0.81)	22	15	—
(15) 人付き合いが苦手だから：高齢者	1.62(0.69)	31	—	15
(16) 人付き合いが苦手だから：若者	2.40(0.99)	9	7	—
(17) ペースに合わせるのが大変だから：高齢者	2.33(0.91)	11	—	3
(18) ペースに合わせるのが大変だから：若者	2.34(0.88)	10	8	—
(19) 気を使うのがどうも煩わしいから：高齢者	1.95(0.73)	25	—	10
(20) 気を使うのがどうも煩わしいから：若者	2.19(0.86)	18	13	—
(21) 声の大きさ、話す速さ、聞こえ方などが違うために話 しづらいと思っているから：高齢者	2.21(0.87)	16	—	4
(22) 声の大きさ、話す速さ、聞こえ方などが違うために話 しづらいと思っているから：若者	2.29(0.89)	12	9	—
(23) 話を忘れてたり混乱したりしがちだから：高齢者	2.17(0.84)	19	—	6
(24) 話を忘れてたり混乱したりしがちだから：若者	1.70(0.75)	30	16	—
(25) 話したいことがあまりないから：高齢者	1.89(0.76)	27	—	12
(26) 話したいことがあまりないから：若者	2.28(0.89)	13	10	—
(27) 付き合う必要性をさほど感じていないから：高齢者	2.03(0.77)	24	—	9
(28) 付き合う必要性をさほど感じていないから：若者	2.24(0.88)	14	11	—
(29) 接する機会が少ないから：高齢者	2.69(0.90)	3	—	1
(30) 接する機会が少ないから：若者	2.74(0.93)	2	2	—
(31) 交流しようと積極的に動くことが少ないから：高齢者	2.46(0.86)	8	—	2
(32) 交流しようと積極的に動くことが少ないから：若者	2.81(0.92)	1	1	—

あまり思わない100名 (49.0%)、まったく思わない13名 (6.4%) で、平均は2.64 (SD=0.77)。交流に積極的な姿勢を示すものは半数弱であった。

- 4) 交流困難度 お年寄りとはお付き合いしにくいと、とても思う18名 (8.8%)、やや思う90名 (43.9%)、あまり思わない84名 (41.0%)、まったく思わない13名 (6.3%) で、平均は2.26 (SD=0.74)。約6割が高齢者と付き合いにくい意識を持っている。

(2) 対人関係形成の困難に関する原因認知の評定

原因認知の中では上位10項目中8項目と、総じて若者側の原因が上位にあげられた (Table1)。若者側と高齢者側に分けて見ると、いずれの側でも交流する機会がないこと、交流しようとする積極性がないことの2つが高く評定された。次いで若者側では、話が上手くない、上手に付き合う方法が知らないというスキルの不足、高齢者側では、若者のペースに合わせるのは大変、若者とは声の大きさなどが違うための話しづらさという、やはりスキルの違いに関わる項目の評定が高い。

(3) 原因認知の因子分析

1) 先行研究と同じ項目の因子構造

田中(1995)の行った留学生と日本人学生との対人関係の困難の原因認知に関する先行研究と同じ項目(質問項目1~13, 16の14項目)のみで、その因子構造を探るため因子分析(主因子法)を行った。固有値の推移と解釈可能性を確認しながら、固有値1以上を基準に因子数を決定した。その結果、Table2のような3因子に分かれた。第1因子は、高齢者側の知識やスキルの不足、無関心、苦手に関するものに加えて、若者側の知識の不足、無関心に関するものに高い負荷量が見られ、両世代で知識の不足、無関心が共通していたので「世代間距離」と命名した。第2因子は、若者側の人付き合いが苦手なことやお年寄りが苦手などに高い負荷量が見られたので、「若者世代の消極的態度」と命名した。第3因子は、高齢者側の魅力不足や話が上手くないなどの項目に高い負荷量が見られたので、「高齢者に対する否定的評価」と命名した。

Table2 先行研究と同じ項目(14項目)に関する因子分析

原因の認知	因子			共通性
	I	II	III	
(5) 知識不足：高齢者	.752	-.092	.085	.397
(3) スキル不足：高齢者	.736	-.127	.207	.411
(7) 無関心：高齢者	.652	-.108	.047	.624
(9) 苦手：高齢者	.633	-.025	-.043	.482
(6) 知識不足：自分	.446	.340	-.259	.562
(8) 無関心：自分	.408	.306	.195	.399
(16) 人付き合い苦手：自分	-.306	.770	.206	.391
(2) 話下手：自分	-.146	.705	-.078	.521
(4) スキル不足：自分	.305	.532	-.237	.383
(10) 苦手：自分	.342	.442	.037	.488
(11) 多忙：高齢者	.054	-.075	.509	.154
(13) 魅力不足：高齢者	.048	.206	.497	.369
(1) 話下手：高齢者	.317	.016	.417	.502
固有値	4.74	1.70	1.22	7.66
寄与率(%)	30.01	8.24	4.29	42.53

Table3 対人関係の困難の原因認知に関する因子分析

原因の認知	因子						共通性
	I	II	III	IV	V	VI	
(28) 必要性：若者	.723	.152	.078	.375	.034	.059	.697
(26) 意欲：若者	.684	.184	.185	.189	.189	.121	.621
(13) 魅力：高齢者	.677	.315	.013	.030	.115	.075	.578
(8) 無関心：若者	.645	.068	.421	.048	.057	.300	.693
(18) ペースの違い：若者	.567	-.106	.155	.122	.476	.264	.668
(20) 煩わしさ：若者	.558	.137	.198	.024	.407	.195	.574
(10) 苦手：若者	.541	-.026	.348	.014	.210	.423	.638
(11) 多忙：高齢者	.093	.746	.142	-.061	.044	.032	.593
(25) 意欲：高齢者	.238	.723	.147	.187	.081	-.034	.645
(24) 認知能力：若者	-.152	.651	.275	-.071	.192	.055	.588
(15) 人付き合い苦手：高齢者	.124	.640	.171	-.092	.233	.155	.522
(14) 魅力：若者	.206	.599	.047	.176	.082	.075	.576
(27) 必要性：高齢者	.381	.550	.146	.391	.029	.367	.627
(7) 無関心：高齢者	-.020	.278	.738	.103	.120	-.071	.652
(9) 苦手：高齢者	.116	.189	.653	.141	.165	.073	.526
(5) 知識：高齢者	.268	.197	.649	.117	.192	.056	.588
(3) スキル：高齢者	.332	.216	.623	.016	.239	.072	.602
(29) 機会：高齢者	-.048	.083	.082	.820	.168	.049	.719
(30) 機会：若者	.112	-.098	.183	.752	-.047	.238	.680
(31) 積極性：高齢者	.111	.163	.085	.729	.202	-.073	.624
(32) 積極性：若者	.379	-.126	.086	.634	.136	.155	.604
(21) 身体機能：高齢者	.023	.248	.234	.221	.713	.075	.680
(22) 身体機能：若者	.112	.165	.203	.058	.702	.187	.611
(23) 認知能力：高齢者	.256	.134	.065	.070	.653	-.015	.519
(17) ペースの違い：高齢者	.212	-.013	.328	.338	.521	.032	.539
(19) 煩わしさ：高齢者	.193	.368	.459	.133	.469	.040	.623
(2) 話下手：若者	.088	.121	.038	-.058	-.043	.755	.596
(16) 人付き合い苦手：若者	.158	.269	-.144	.120	.098	.730	.675
(4) スキル：若者	.133	-.103	.291	.052	.186	.664	.591
(6) 知識：若者	.137	-.042	.457	.131	.069	.492	.493
固有値	9.74	2.68	2.07	1.75	1.57	1.25	19.06
寄与率(%)	30.45	8.37	6.47	5.47	4.92	3.92	59.59

2) 本研究で用いた全項目に関する因子分析

今回設定した原因認知の全項目16領域32項目に関して、その因子構造を探るため因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。固有値の推移と解釈可能性を確認しながら、固有値1以上を基準に因子数を決定した。その結果、Table3に示すような6因子が抽出された。第1因子は、若者側の無関心や意欲のなさ、必要性を感じないなど、高齢者との交流に対する消極性が含まれており、「自分の消極的態度」と命名した。第2因子は、第1因子とは逆に、高齢者の側の若者との交流に対する意欲のなさがみられており、「高齢者の消極的態度」と命名した。第3因子は、高齢者の側の若者に対する知識の少なさや上手に付き合う方法を知らないという項目が含まれており、「高齢者のスキル不足」と命名した。第4因子は、両方に共通して機会のなさ、積極性のなさに関する項目が含まれており、「世代間距離」と命名した。第5因子は、両世代の話し方の違い、ペースの違いから生じる話しづらさが含まれており、「世代間の相違」と命名した。第6因子は、若者側の知識や上手に付き合う方法を知らないこと、話が上手くないなどの項目が含まれており、「自分のスキル不足」と命名した。

(4) 原因認知の自他責型による解析

若者側と高齢者側の原因認知の対項目を用いて、相手側の評定から自分側の評定、つまり高齢者側から若者である自分の得点を引いて得点差を求め、その内容について自他のどちらにより責があると考えたものの比重を示すものとみて、「自他責得点」とした (Table4)。点数が低いほど自責傾向、高いほど多責傾向、数値がマイナスなら自責傾向であることを意味している。

自他責得点の平均値は、絶対値が大きい順に平均値 (SD) を挙げていくと、意欲-0.45 (0.98)、機会0.41 (1.05)、混乱の有無0.38 (0.95)、苦手0.31 (1.03)、多忙-0.30 (1.22)、であった。上位10項目中8項目がマイナスの値を示し、自分つまり若者側の原因の方をより重く評定していた。また、相手側と自分の側の評定間でt検定を行い、有意差が見られたのは16項目中10項目であった。その10項目中7項目は若者側の自責傾向を示すも

Table4 原因認知の自他責得点

原因認知の領域	高齢者側-若者側				順位
	平均(SD)	t	p		
① 話上手	-0.24(1.16)	-4.21	**		6
② スキル	0.04(1.09)	0.81			13
③ 知識	-0.10(0.98)	-2.16	*		9
④ 関心	0.09(1.04)	1.78			10
⑤ 苦手	0.31(1.03)	6.10	**		4
⑥ 多忙	-0.30(1.22)	-5.02	**		5
⑦ 魅力	-0.08(1.05)	-1.46			12
⑧ 交友	-0.23(1.14)	-4.16	**		7
⑨ ペース	0.00(0.87)	0.00			16
⑩ 煩わしさ	-0.09(0.85)	-2.09	*		10
⑪ 身体機能	-0.14(0.80)	-3.52	**		8
⑫ 認知能力	0.38(0.95)	8.14	**		3
⑬ 意欲	-0.45(0.98)	-9.33	**		1
⑭ 必要性	0.03(0.89)	0.78			14
⑮ 機会	0.41(1.05)	7.93	**		2
⑯ 積極性	-0.01(0.83)	-0.30			15

**p < .01, *p < .05. 順位は絶対値の大きい順につけた。

のであり、若者の側が有意に高齢者よりも自身の側に原因があるという認知を意味する。

自己責得点に関して、その因子構造を探るため因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。固有値の推移と解釈可能性を確認しながら、固有値1以上を基準に因子数を決定した。その結果、Table5に示すような3因子が抽出された。

第1因子は、意欲のなさや必要性のなさなど、交流に対する消極性がみられており、「消極的態度」と命名した。第2因子は、スキルや知識の不足、話の上手さなどが含まれており、「スキル不足」と命名した。第3因子は、気遣いから生じる煩わしさやペースの違いから生じる話しづらさが含まれており、「世代差による否定的評価」と命名した。概ね原因認知に関する因子分析と類似した構造を示した。

(5) 教育的介入への関心

高齢者との交流に関わるソーシャルスキルの学習のための講義は、とても聞いてみたい34名(16.6%)、やや聞いてみたい127名(62.0%)、あまり聞きたくない36名(17.6%)、まったく聞きたくない8名(3.9%)と答えた。75%以上が学習意欲を示し、ソーシャルスキル学習による教育的介入の潜在的ニーズを示した。

4. 考 察

若者と高齢者の対人関係の形成が困難である原因に対する認知に関しては、以下の3点が明らかになった。第一に、若者側項目でも高齢者側項目でも、「積極性」と「機会」のなさへの原因認知が高い。このことは、一般高齢者との交流に限られたものであるという、交流の現状を尋ねた項目の結果とも一致する。若者にとって家族以外の高齢者と接する機会はほとんどなく、その機会を積極的に持とうとする姿勢もないという、消極的な態度が確認された。因子分析においても交流への「消極的態度」の因子が抽出されている。こうした高齢者との交流に対する「消極性」が、若者と高齢者の交流が進まない最も大きな原因と考えられる。

第二に、評定の比較的上位に位置したのは、若者側の要因であったことである。機会と積極性以外には、「上手く付き合う方法を知らない」など、若者側のソーシャルスキル不足関連の項目への認知が高い。さらに「話が上手くない」「人付き合いが苦手」など、若者側にはコミュニケーションのス

Table5 対人関係困難の原因認知の高齢者側と自分側の評定差に関する因子分析

評定差	因子			共通性
	I	II	III	
⑬ 意欲	.741	-.011	-.118	.448
⑭ 必要性	.673	.057	-.010	.457
⑫ 認知能力	-.406	.052	.085	.126
② スキル	.086	.681	-.020	.479
① 話上手	-.165	.640	.145	.438
⑧ 交友	.042	.490	.142	.304
③ 知識	.137	.465	-.081	.228
⑩ 煩わしさ	-.106	-.051	.642	.334
⑨ ペース	-.054	.053	.538	.268
⑤ 苦手	.083	.124	.522	.382
④ 関心	.366	-.049	.462	.555
固有値	3.53	2.04	1.33	6.90
寄与率(%)	18.16	8.89	3.65	30.70

キル欠損や苦手意識が伺える。若者側にスキル欠損などに関して自責的な認知が見られたことは、それを補うための介入として、スキル学習などを行う良いきっかけともなりうるとも考えられる。若者側にみられた自責傾向は、Kashima & Triandis(1986)が報告した、欧米とは逆の「セルフサービングバイアス」を背景にしている可能性もあろう。これは人が自らの成功の原因には能力や努力などの内的要因を、失敗については運や課題の困難さといった外的要因を重視しやすい傾向を指し、欧米の研究では繰り返し確認されてきている。しかし日本など東アジア文化圏では、逆に自分の失敗を内的要因に帰属し、自分の成功を外的要因に帰属する傾向があるという(Kashima & Triandis, 1986)。今回の若者は自分側の原因への帰属が高いが、交流の困難が真に若者の責によるのか、原因帰属のスタイルが自責的だったのかは、慎重に解釈する余地を残していよう。

第三に、対人関係形成の困難に関する原因認知の評定に関して、先行研究の同じ項目のみを用いた因子分析の結果、関係性の困難の原因として「世代間距離」、「消極的態度」、「高齢者に対する否定的評価」という3つの側面が見出され、自他責得点による認知は、「消極的態度」、「スキル不足」、「世代差による否定的評価」の3因子である。先行研究で見られた留学生による原因認知の因子は、相手の批判、自分の知識、自分の態度、機械的理由の4つであり、留学生の自他責得点は知識面と態度面の2因子である(田中, 1995)。原因認知に、相手側へのネガティブな評価の因子、自分側の態度に関する因子が見られた点は共通している。今回の若者たちにおいては、それらに加えて、知識や関心が互いに薄く、高齢者はスキルも不足しており付き合いも苦手なものという、疎遠さを反映するような項目が因子としてまとまった。留学生の場合のような、機会や理由といった機械的な理由に関する因子は見られず、接点の希薄さを背景にした距離感にまとまっているように見受けられる。

本調査で用いた全項目に関する因子分析の結果では、関係性の困難の原因として「消極的態度」、「スキル不足」、「世代差」という3つの側面が見出された。これは、大学生と高齢者の交流が進まないという問題の解決に向けて、いわば3つの道筋があることを示唆する。この因子構造は自他責得点の評定差に関する因子分析の結果とも概ね共通である。原因認知に自他への分離因子がみられる点は共通しているが、今回は世代間の距離の因子が自他両側の項目から成っており、疎遠さなど交流への消極性は両側で共有する認識であることが示唆される。また先行研究では責任観が情緒面と行動面に分岐する傾向にあったが、今回は自他責点において情緒面の独立がみられず、感情的反応は事実認識に組み込まれる傾向がある。今回、お互いが知識を持たず付き合い方を知らないというソーシャルスキル不足の因子が独立したことは、従来の交流困難の捉え方にスキルの概念を付加する必要を裏書きする。世代差の認識の因子は、話すペースや声の大きさの違いなど、世代による相違点に対処するコミュニケーション技術の必要を示唆しており、スキルのニーズが潜在していよう。スキルを身につけ、機会を設定することで、世代間の分離感が和らぎ、交流と相互理解が進むきっかけとなる可能性があるのではないだろうか。

菊地・堀毛(2000)は、ソーシャルスキルの網羅的リストに、“話をあわせる”などの「年上・年下

と付き合うスキル」や、外国人など異なる文化背景を持った人々との「異文化接触のスキル」を含めている。交流相手としての高齢者と外国人の異質性は、文化と世代というヨコ(地域)とタテ(時間)の違いはあるが、「異質性」を持つ人という点で共通する。高齢化とグローバル化という現代社会の潮流の中で、「異質性」やそれを持つ人々と上手く折り合い付き合っていくソーシャルスキルとしてみるなら、互いに示唆的なものと捉えられよう。

今回はソーシャルスキルの不足は、若者と高齢者の交流が困難であることの一因を成すという認識が確認されたが、同時にそれは解消のための大きな手がかりを意味している。さらに学習への潜在的ニーズも確認されている。不足しているソーシャルスキルを身につけることは理論的には可能で、様々な対象への学習訓練の実践例も多い。留学生と日本人学生の対人関係を良好にするための学習支援として、異文化間ソーシャルスキルのトレーニング例もある。それは欠損スキルの習得をはかり、効果的なスキル表出法の習得を目指す認知行動療法を背景にしている。適切なソーシャルスキルを適切な状況で使用できる能力を獲得できれば、円滑な対人関係の形成にとって効果があると期待される。若者と高齢者の関係形成も、スキル獲得によって交流が促進される可能性があるだろう。それにはまず、若者と高齢者との交流に必要とされるスキルの詳細を、具体的に明らかにする必要があるだろう。

本調査では、大学生のみを調査対象にしている点で限定的な結果であり、他の世代と高齢者との関わりについては更なる調査が必要であろう。また高齢者の側から見た若者との交流困難に関する原因認知も調査の必要がある。さらに高齢者と若年層との関わりも、家族内外に渡り多様な関係が考えられる。交流を促進しない理由や促進する要因も、対象を分けていけば様々と想像される。ソーシャルスキル学習の実践を視野に入れた場合は、その有効範囲や、他の有効な方法との選択の問題など、実践的知見を蓄積していく必要があるだろう。

引用文献

- 秋山弘子 1997 ジェンダーと文化；男性と女性のソーシャル・ネットワーク 東洋 柏木恵子、北山忍(編) 『文化心理学』 東京大学出版会
- 秋山弘子 2000 日本の老年社会科学から欧米へ向けての発信 老年社会科学 22(3) 338-342
- 林陽一 1989 老年期 依田明(編) 『性格心理学新講座2 性格形成』 金子書房 Pp.137-150
- 藤田綾子 2000 『高齢者と家族』 ナカニシヤ出版
- 藤田綾子 2001 高齢者とコミュニケーション 高木修(監修)・土田昭司(編集) 『シリーズ21世紀の社会心理学1 対人行動の社会心理学—人と人との間のところと行動—』 北大路書房 Pp.126-135
- 古谷野亘・岡村清子・安藤孝敏・長谷川万紀子・浅川達人・横山博子・松田智子 1995 都市中高年の主観的幸福感と社会関係に関連する要因 老年社会科学 16(2) 115-124
- Kashima,Y. & Triandis,H.C. 1986 The self-serving bias in attributions as a coping strategy : a

- cross-cultural study. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 17, 83-97
- 菊池彰夫・堀毛一也 1994 『社会的スキルの心理学 100のリストとその理論』 川島書店
- 厚生労働省 平成13年度国民生活白書—家族の暮らしと構造改革— p25
- 西村昌記・石橋智昭・山田ゆかり・古谷野亘 2000 高齢期における親しい関係—「交遊」「相談」「信頼」の対象としての他者選択— 老年社会科学 22(3) 367-374
- Palmore,E.B. 1990 *Ageism : negative and positive*. New York : Springer Pub. 奥山正司・秋葉聡・片多順・松村直道(訳) 1995 『エイジズム—優遇と偏見・差別—』 法政大学出版局
- Ryan,E.L., See,S.K., Manneer, W. B., & Trovato, B. 1994 Aged-based perceptions of conversation skills among younger and older adults. In M.L.Hummert, J.M.Wiemann, & J.F.Nussbaum (Eds) , *Interpersonal communication in older adulthood*. Newbury Park, CA : Sage. Pp.15-39
- 嵯峨座晴夫 2000 21世紀高齢者の生き方—新しい高齢社会構築のための提言 生きがい研究 第8号
- 斎藤勇 2000 『イラストレート人間関係の心理学』 誠信書房
- 総務庁長官官房高齢社会対策室 1999 児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査
- 玉野和志・前田大作・野口裕二・中谷陽明・坂田周一・Jersey Liang 1989 日本の高齢者の社会的ネットワークについて 社会老年学 No.30 27-36
- 田中共子 1995 在日外国人留学生による日本人との対人関係の困難に関する原因認知 学生相談研究 Vol.16 No.1 23-31
- 田中共子 2003 日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知の比較 学生相談研究 Vol.24 41-51
- 塚野州一 2000 『見る読む生涯発達心理学—バリアフリー時代の課題と援助—』 北大路書房